



新潟国際情報大学・学長

平山 征夫

一人ひとりの能力を高め 才能を開花させるために 地方にも多様な大学が必要

私の視点 — 課題をこう捉える —

教育の原点を軽視する 改革の方向性には疑問

中央教育審議会を中心として、大学改革についての熱心な議論が続いていますが、その内容や方向性にはいささかの疑問を感じています。改革にあたっては、変えるべきものと変えてはならないものを見分けることが重要で、変えてはならないものは、言うまでもなく教育の原点です。それは「一人ひとりの能力を高め、才能を開花させること」に尽きます。一方、変えるべきものは、近年では「内向きの発想」で

あり、グローバル化の推進は正しい方向だと思います。

ただし、その具体的な議論や政策を見ると、「世界に勝てる人材を育成する」「世界の大学トップ100に日本の大学10以上を入れる」など、市場の競争原理に頼った改革に終始している印象がぬぐえません。

教育の原点に立ち返れば、大学教育がめざすのは、競争に勝つための人材を育成することでも、国力を高めることでもないはず。一人ひとり異なる人生を生きる学生を、国家の目標に沿うように、大学教育によって誘導す

るような改革は、教育の原点を軽視していると言わざるを得ません。

競争原理だけで語れない インフラとしての大学

学生は何を学びたいかを大学に要求し、大学はそれに答える教育内容を用意するという関係であるべきで、「自分は何を学びたいのか」「学生の要求に応えられているか」と、それぞれもっと真剣に考えなくてはなりません。そして、学んだことが社会、特にその地域での仕事につながっているという状態が理想です。こうした関係の

構築が進んでこなかったため、大学の存続を市場の競争原理に委ねる政策にシフトしたのだと私は考えます。

競争原理のみで大学を考えるのは間違いで、定員を満たせない大学の補助金を減らす政策を続ければ、地方から順に大学が消滅するでしょう。人口が少ない地域でも、病院や道路などの生活に欠かせない社会的インフラの整備が必要のように、故・宇沢弘文氏の言う「社会的共通資本」として大学を捉えるべきなのです。

国は地方創生を掲げつつも、知恵を出した自治体にしか予算を配分しない方針、国が定めた方向に沿って改革を進める大学だけに予算を重点配分する政策を打ち出しています。

このような政策では、地方で大学の多様性が確保できず、一人ひとりが自分に合った大学を選ぶことができなくなってしまいます。大学は社会的共通資本であるとの認識がなければ、特色ある大学と地方創生を担う人材が消え、結局は地方の疲弊を招くことになります。

“地消地産”のサイクルと 大学、若者の連携を促す

地方の大学が社会的共通資本としての役割を果たし続けるには、行政の協力が不可欠です。ただし、地方自治体は、公立大学以外に政策的に関わることはできません。国は、地方自治体が高等教育に関わって、地域と若者の連

携を促す政策を打ち出せるようにすべきです。

私は、これからの地方経済のあり方として、地産地消ならぬ「地消地産」を提唱しています。地域で消費するのは地域で生産し、それによって雇用を確保するという考え方です。実際、そうした取り組みによって活性化している自治体もあります。地域で生産したものを他の地域に販売する「地産地消」が理想的ではありますが、まずは地元で消費するサイクルを構築し、そこに社会的共通資本である大学と若者が連携できるように、政策で担保すべきです。そうすることにより、地域の価値が再発見され、新しい価値が創造されると信じています。

新潟国際情報大学の改革

オープンな学生会館と 地域との協働空間を開設

本学は、私が新潟県知事を務めていた1994年に開学しました。以降、国際化と情報化に対応した教育を核とし、地域に評価される大学として歴史を重ねてきました。本学の入学者の約9割は新潟県出身者で、卒業生の約7割が県内に就職しています。地域に根差した大学としての役割を果たすため、学生と地域の連携を促進する試みをいくつも実施しています。

その1つが新潟中央キャンパスのリニューアルです。キャンパス開設10年目の2013年に、地域の人々がコミュニケーションを深め、情報共有するスペースとして、コワーキング・ラボ「こくじょう」を設置しました。2014年11月には、新潟市議会が議会報告を行い

ました。ワークショップでは、議員と本学の学生が市の課題について話し合いました。外部講師によるイベントも数多く開催されています。学生がゼミやサークル、就職活動などに利用するサテライトキャンパスにオープンな

スペースを設けたことにより、地域の人々と学生が触れ合う機会が徐々に増えています。

2014年には同じ発想で、みずき野キャンパスに学生会館「MELF」を開設し、学生食堂も規模を広げて同じ建



「つなぐ場」として新しく生まれ変わった学生会館 MELF。「Making Everlasting Friends」を略したネーミング。「永遠の友をここでつくろう」という意味が込められている。



新潟中央キャンパスのコワーキング・ラボ「こくじょう」。地域の人々と学生が共に学び合う場として、活用が進んでいる。

物に集約しました。主に学生の課外活動での利用を想定していますが、学生と学生、学生と教職員、大学と社会を「つなぐ場」というコンセプトに基づき、地域の人々にも自由に利用してもらいます。ここをベースに、地域の活動に学生が参加したり、地域の人々が学生の活動に触れたりする機会を提供していきます。地域の価値の再発見・創造の場となることを願っています。

高校生に提供したい大学の学びに触れる機会

本学は、日本文化の理解と国際的視野に基づき、情報文化の発展に貢献で

きる人材の育成をめざしています。創立20周年にあたる2014年度、情報文化学部情報文化学科を国際学部国際文化学科に改組し、2学部2学科体制にしました。深い教養と専門性に支えられた人間性豊かな人材の育成に取り組んでいます。

学部では、それぞれ基本的な知識・技能を身に付けるのみならず、語学力に加えて国際社会の成り立ちやしくみ・各国の文化を理解できる人材、経営学的な知識をベースとしたシステムエンジニアの育成を推進しています。今後は、学生の要求や地域のニーズ、社会の動向に合わせて、各学部の専門

性の見直しを図り、アクティブラーニングの手法を取り入れた地域の課題解決の授業にも力を入れていきます。

高校と連携し、生徒が本学の授業を受講すれば、入学後に単位として認定するアドバンスト・プレイズメントのしくみも導入したいと思っています。私自身、大学で偏微分について学んだ際、「高校時代に教わりたかった」と感じましたし、大学での学びに早く触れ、意欲を高めるといったことがあってもよいと思います。

新しいしくみを積極的に取り入れ、一人ひとりが能力を高め、才能を開花させる教育を実践していきます。

トップの横顔に迫る

知事時代の思い出

「地域の価値の再発見」に力を入れました。思い出深いのは、「大地の芸術祭」に関わったことです。豊かな自然の中に現代アートを設置する世界最大級の国際芸術祭で、現在も地域活性化に貢献しています。

2001年、ビッグスワン・スタジアムで、さだまさしさんが音楽・主演を担当したミュージカル「にいがた緑百年物語―木を植えた男―」が上演され、とても感動的でした。木を植える県民運動のキックオフイベントとして行われたもので、思い入れのある事業です。

キャンパスの好きな場所

入り口近くにある藤棚の丘と、中庭がお気に入りです。藤棚の丘は、平坦なキャンパスの中にあって眺め

のよい場所で、いずれはそこをすり鉢状の野外ステージにし、周囲に木を植えて「大学の森」をつくってみたいと個人的に考えています。森に囲まれた野外ステージが、学生と学生、学生と教職員、大学と社会を新たに「つなぐ場」になるでしょう。

尊敬する人物

知事になる前に勤めていた日本銀行の二代目総裁・富田鐵之助は、勝海舟の門下生としてアメリカに留学し、日銀の基礎をつくり上げた人です。絶対に信念を曲げず、大蔵大臣から政策的な融資拡大を要請されても、金融調整の一元化が必要との持論を訴えて真正面から反対し、罷免されました。中央銀行にはそうした姿勢が不可欠で、現在の日銀にもその大切さを忘れずにいてほしいと思っています。



「大地の芸術祭」に出品されたクリスチャン・ラビ氏の作品「砦61」（倉谷拓朴氏撮影）。



みずき野キャンパス南端の緩やかな丘にある藤棚。夏には木陰をつくってくれる。

ひらやま・いくお ● 1944年生まれ。新潟県柏崎市出身。1967年横浜国立大学経済学部卒業。日本銀行新潟支店長、仙台支店長を経て1992年新潟県知事に就任、3期12年務め2004年に退任。長岡技術科学大学特任教授を経て2008年から現職。主な著書に『私はこんな知事になりたかった』がある。